

箕作阮甫の孫と統計との関わり

統計図書館コラムや統計図書館ミニトピックス等を執筆する過程で、よく箕作家の人々が登場しました。ここで、箕作阮甫の孫と統計との関わりについてまとめてみましたので紹介します。

	子（次女は夭折）	孫（統計との関わりのある人）	
箕作阮甫 ¹ 蘭学者 とる	長女せき 吳黄石 蘭学者（医師）	吳文聰 ² 統計学者 	日本の統計理論のパイオニア（欧米の統計学の研究、統計学に関する多くの著書の刊行や論文の発表、大学で統計学の講義、東京統計協会の機関誌「統計集誌」の編纂など）、国勢調査創始の功労者（米の第12回人口センサスの視察、「国勢調査法律私案の作成など」として統計の発達に貢献）
		吳秀三 ³ 医学博士 	エステルレン著「医学統計論」の翻訳を行い、その序文を森鷗外に依頼（⇒鷗外の序文に関連して今井武夫との間で統計訳字論争に発展） 代表的著書に『精神病者私宅監置ノ実況』があり、私宅監置の統計的観察を行う
	三女つね（先妻） 箕作秋坪 蘭学者（菊池氏）	箕作大麓 理学博士 【菊池大麓 ⁴ 】 （菊池氏を継ぐ） 	統計集誌第30号（明治17年 1884年）「句点位置改正」において、千進法（thousand、million、billion…）を用いる西洋のように3桁区切りを用いず、万進法（万、億、兆…）を用いる本邦においては4桁区切りを用いるべきであると主張 ※美濃部亮吉（元都知事、統計委員会委員・事務局長を歴任）は菊池大麓の孫（箕作阮甫の玄孫）にあたる
	四女ちま （省吾の死後、秋坪の後妻） 箕作省吾 地理学者（佐々木氏）	箕作麟祥 ⁵ 法学博士 	フランスの統計学者モロー・ド・ジョンネの著書を翻訳し、『統計学一名国勢略論』として出版（明治7年 1874年）（「統計学」の訳字を初めて世に出す） 【写真】（吳文聰）総務省統計局HP、（吳秀三）国立公文書館デジタルアーカイブ「故吳秀三叙勲ノ件」、（菊池大麓・箕作麟祥）国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」

【参考資料】津山洋学資料館HP（津山の洋学）、宮川公男「統計学の日本史」等。

（箕作家関係の系図） https://www.tsuyama-ct.ac.jp/honkou/movooshi/senjiyou99/pamphlet/mitu_07.htm

¹ 箕作阮甫 みつくりげんぽ（1799～1863）：津山で代々町医師を営む家に生まれる。京都に出て医学を学んだ後、宇田川玄真の門に入り、以後洋学の研さんを重ねる。幕府天文台翻訳員となり、ペリー来航時に米大統領国書を翻訳、また、対露交渉団の一員として長崎にも出向く。蕃書調所の首席教授に任ぜられ、幕臣に取立てられた。（【出典】：津山洋学資料館HP）

² 吳文聰 くれあやし（1851～1918）：蘭学者の父黄石の次男として、江戸の青山で生まれ、渡辺魯輔の下で漢学、箕作麟祥（いとこ）の下で英語を学び、大学南校を経て明治3年（1870年）に慶應義塾に入るが、1年足らずで退塾。その後、明治8年、太政官正院政表課に勤め、近代統計の祖とも言われる杉亨二の下で統計学を学び、内務省（明治13年～15年）、農商務省（明治26年～29年、明治33年～大正2年（1913年）農商務省統計課長）を始めとする官公庁に勤務。また、官公庁に勤務する傍ら、開成学校（後の東京大学）、東京専門学校（後の早稲田大学）、慶應義塾などで講師として統計学の教鞭をふるう。（【参考資料】：Bibliographical Database of Keio Economists）、統計の係る偉人との関係は、総務省統計局HP（統計の黎明とその歴史>人物関係）参照。

³ 吳秀三 くれしゅうざう（1865～1932）：蘭学者の父黄石の三男として、江戸の青山で生まれる。東京帝国大学医科大学卒業後、明治30年（1897年）から明治34年、オーストリア、ドイツに留学し、精神病学等を研鑽。帰国と同時に東京帝国大学医科大学教授に就任。我が国の近代的精神医療の確立に貢献。（【参考資料】：国立公文書館デジタルアーカイブ「故吳秀三叙勲ノ件」、都立松沢病院HP「院長コラム Vol.12」）

⁴ 菊池大麓 きくちだいろく（1855～1917）：数学者・教育行政官。洋学者箕作秋坪（旧姓菊池）の二男。幕末・明治初期に、2度イギリスに留学し、ケンブリッジ大学で数学・物理学を学ぶ。明治10年（1877）帰朝後、東京大学教授となる。21年理学博士。23年貴族院議員に勅選。文部省専門学務局長、文部次官を経て、31年東京帝国大学総長。34年第1次桂内閣の文相となる。35年男爵。41年京都帝国大学総長。その後帝国学士院長、枢密顧問官。大正6年（1917）初代理化学研究所長。（【出典】：国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」）

⁵ 箕作麟祥 みつくりりんしょう（1846～1897）：洋学者・法学博士。祖父は蘭学者箕作阮甫。藤森天山・安積良斎に漢学を、家で蘭学・英語を学び、文久元年（1861）蕃書調所英学教授手伝並となる。のち仏学を修め、慶応3年（1867）徳川昭武のパリ博覧会行に随行。帰国後は明治政府に入り、西洋法律書の翻訳、旧民法等諸法典編纂などを通じて、近代法制度の整備に貢献した。この間東京学士院会員、元老院議員、貴族院議員、和仏法律学校（現法政大学）校長、行政裁判所長官などを歴任。また、明治初期には中江兆民・大井憲太郎等が学んだ家塾を開き、明六社にも参加した。（【出典】：国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」）

【補足説明】 6

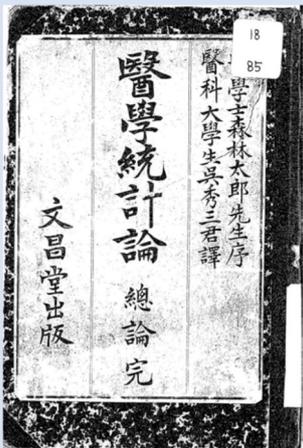
我が国の統計の黎明期における人物相関を調べれば調べるほど・・・我が国の統計の発展に算作家の人々に関係していることが印象的です（統計に係る人物相関は、総務省統計局HP（統計の黎明とその歴史＞人物相関図）参照）。

◆杉亨二は、明六社で**眞作麟祥**に出会います。**眞作麟祥**は、杉亨二の勤務する太政官政表課に**呉文聰**を推薦（**呉文聰**は、杉亨二らと甲斐国人別調も実施）。**呉文聰**は、明治33年（1900年）、米国の第12回人口センサスの状況を視察。帰朝後「国勢調査法律私案」を起草、「国勢調査二関スル法律」の制定に向けた行動を展開。

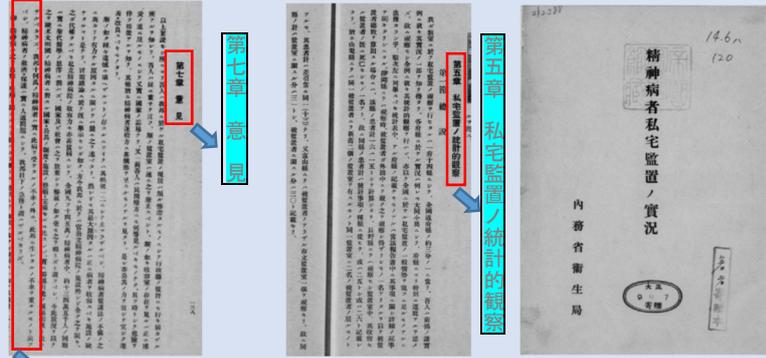
◆第19回国際統計協会会議（1930年）の日本招致に尽力（東洋で初の会議開催）、国勢調査準備委員会委員等政府の各種統計関係委員を歴任した柳澤保恵は、学習院で**呉文聰**から統計学を学びました。

◆**呉秀三**は、『医学統計論』（明治22年^{1899年}）の翻訳を行い①、その序文を森鷗外（**呉秀三**の先輩）に依頼したことに端を発し、森鷗外（森林太郎）と今井武夫（杉亨ニグループ）との間で**統計訳字論争**に発展（明治22年）。また、明治43年から大正5年（1910年～1916年）にかけて精神障害者の私宅監置に関する実態調査を実施し、統計的観察を行い②、『精神病者私宅監置ノ実況』（大正9年^{1920年}）を著わしました。

① **呉秀三**訳『医学統計論』



② **呉秀三**、榎田五郎 著『精神病者私宅監置ノ実況』



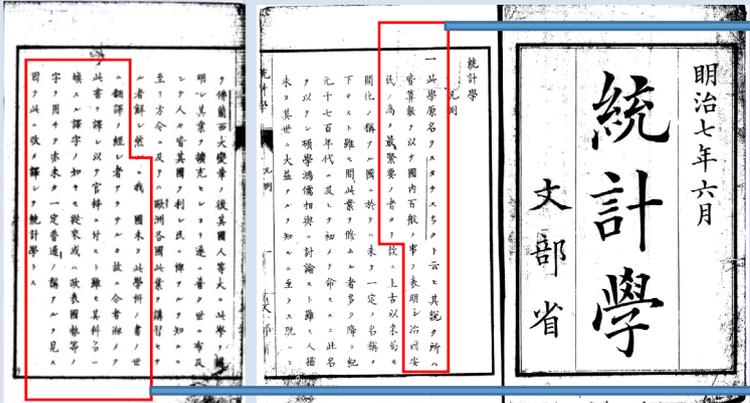
「・・・我邦十何万ノ精神病者ハ実ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ、此邦ニ生レタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ。精神病者ノ救済・保護ハ実ニ人道問題ニシテ、我邦目下ノ急務ト謂ハザルベカラズ。」
 ※この意見は、都立松沢病院HP「院長コラム Vol.12」によれば「現在なお、日本の精神科医療関係者を叱咤し、鼓舞する言葉」だそうです。

【画像】 国立国会図書館デジタルコレクション

◆菊池大麓に師事した藤澤利喜太郎（1861～1933）（菊池大麓の勧めでヨーロッパに留学し、日本人で初めて当時の最先端の数学を学んだ理学博士。）と**呉文聰**ら杉亨ニグループとの間で**統計学論争**を展開（明治27年^{1894年}）。論争は、藤澤博士が「統計活論」と題する通俗的な講演会において、統計のことを研究する人は少数で、統計の歴史はわずか百年ばかりであり、哲学や数学と肩を並べるに至っていないことから「**統計は学問ではない**」、「**我が国に統計家はいない**」旨発言した速記録に端を発しています。藤澤博士は、生命表の作成に際し、人口統計^{（戸籍ベース）}を利用して『生命保険論』（明治22年）を著わし、その過程でコーホート分析を行い、当時の人口統計の問題が散見されたことなども、杉グループへの批判ともとれる発言の底流にあるようです。

藤澤博士は、論争の翌年、帝国大学法科大学で統計学について講義を行い、大正9年（1920年）には中央統計委員会臨時委員に任ぜられ（昭和2年^{1927年}～常任委員）、その後、『総選挙読本』（昭和3年^{1928年}）において第一回普通選挙の統計的な分析も行い選挙制度への提言も行いました。こうしてみると、藤澤博士は、我が国の統計を発展させるために貢献した面もあると思います。ちなみに、学問としての「統計学」という訳字を初めて考案し、明治7年（1874年）に世に出したのは**眞作麟祥**。

眞作麟祥訳『統計学』



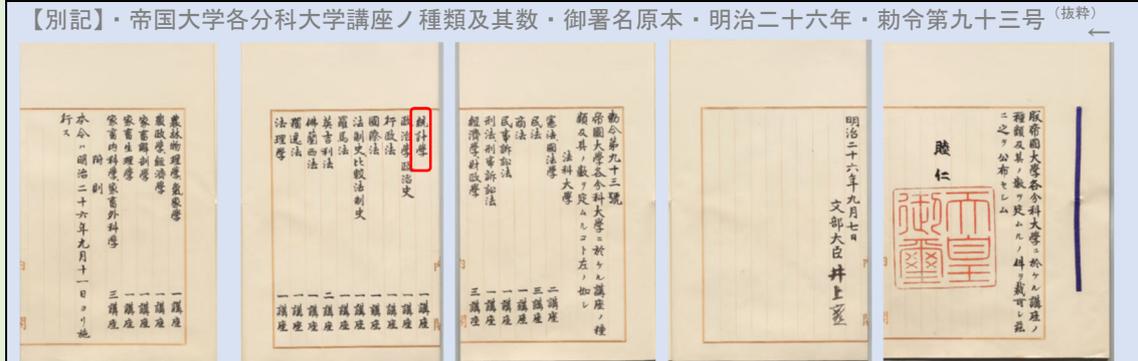
此学原名をスタチスチックといひ、その説く所は皆算数を以て 国内百般の事を表明し、治国安民の爲め最も緊要の者たり。

然るに我国未だ、此学科の書の世に翻訳を経し者あらざるが故に今者、初めて此書を訳し、以て官梓に付すと雖も其科名に填する訳字の如きも従来、あるいは政表、国勢等の字を用いて亦未だ一定普通の称あるを見ず。因て此に改め訳して統計学とす。

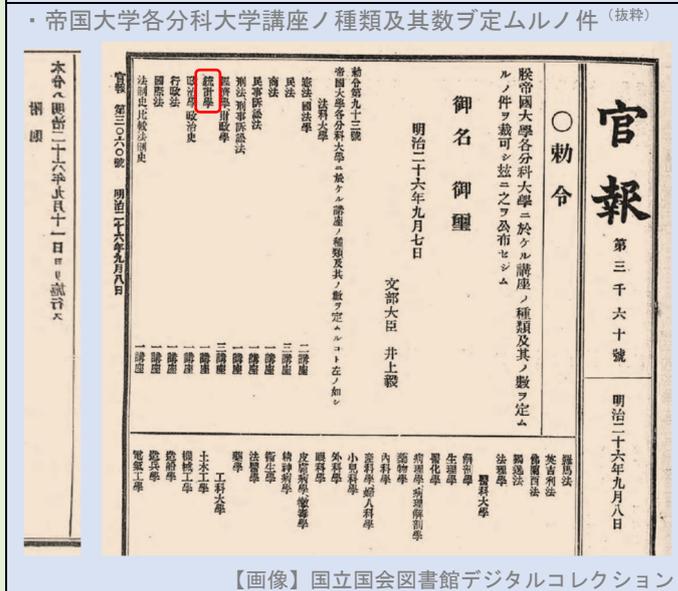
【画像】 国立国会図書館デジタルコレクション

6 【参考資料】 藪内武司「日本統計学史における呉文聰」、島村史郎「日本統計史群像」、日本数学会HP（藤澤利喜太郎生誕150年祭）、宮川公男「統計学の日本史」、上藤一郎「藤澤利喜太郎と日本の統計学」、川崎茂「日本の統計学の歴史的發展における公的統計の役割」等。【参考情報】 本資料で触れた二つの論争については、宮川公男「福澤諭吉の文明論と統計（スタチスチック）論」（三田評論 2020年6月号所収）でコンパクトに紹介されています。

なお、藤澤博士の呉文聰への追悼文が呉建「呉文聰」に所収されており、その追悼文で、菊池大麓を「余の恩師」とし、藤澤博士は、記憶があいまいな面はあるものの、藤澤博士の「統計活論」に対する批評をする呉文聰の論文で、彼の名を初めて知った覚えがあると、菊池大麓との関係から呉文聰とは、菊池家の冠婚葬祭などの折に面識があった模様（時候の挨拶を交わす程度の関係）。その後、二人は、明治 33 年（1900 年）の洋行（藤澤利喜太郎は第 2 回万国数学会議（パリ））に出席、呉文聰はアメリカの第 12 回人口センサスの状況視察等で欧米を訪問）の帰路、若狭丸で最も多く接触した模様。その追悼文の最後に「惟におもふに君は所謂杉派の統計家にして、一生涯を通じて始終一貫自個自己の天職に忠實忠実なりし人なり」としています。ここで「統計家」を用いていることが印象的です（藤澤博士と呉文聰の論争は、前掲のとおり、博士の「我が国に統計家はいない」旨の発言も契機）。



【画像】国立公文書館デジタルアーカイブ



【雑感】

明治 26 年（1893 年論争の前年）に既に学問としての統計学の存在が左に掲げる勅令で認知されており、呉文聰ら杉亨ニグループは、まず、藤澤博士に対し、「統計は学問ではない」とする博士の主張とこの勅令との関連を確認したほうがよかったように思います。（当時、統計が学問か否かについては、既に、今更感の強い議論だったように思います。）

ちなみに、呉文聰は、明治 25 年、帝国大学に統計学の講座を設け、委嘱されれば講師を引き受ける旨の働きかけを行いました。大学には統計の講師が一人いる上に、俸給もないとして却下されたそうです（【参考資料】数内武司「日本統計学史における呉文聰」）。

明治 28 年には、論争相手である藤澤博士が帝国大学法科大学で統計学を講義しました（【参考資料】川崎茂「日本の統計学の歴史的發展における公的統計の役割」）。そして、その 5 年後、前述のとおり洋行帰りの若狭丸で二人が遭遇することになり、何とも…筆者にとって衝撃的でした。

【画像】国立国会図書館デジタルコレクション

【参考】箕作家の人々が登場する統計図書館コラム

統計図書館コラム【人物編】	
呉文聰	【No. 0001】 福沢諭吉
	【No. 0002】 大隈重信
	【No. 0005】 呉文聰
	【No. 0010】 柳澤保恵
呉秀三	【No. 0006】 森鷗外
統計図書館コラム【雑学編】	
著作藤澤	【No. 1002】 辞書・公文書に初めて「統計」が登場した時期
菊池大麓	【No. 1010】 統計報告書における数値の 3 桁区切り
美濃部亮吉	【No. 1012】 民間の統計と統計法

【余談】 サンドイッチ状態！？

今回の調べもので前述の二つの論争には、サンドイッチ状態にいる人がいることが分かりました。



【注】 呉秀三「統計ノ語ハ終ニ我ヲ機辟ニセリ」（明治 22 年 1889 年発行の「経済及統計」第 9 号に所収）によれば「森林太郎氏ト今井武夫氏トハ余ニ旧来ノ交誼アリ」とされています。また、タイトル中の「機辟」については、本文でも「…統計ノ二字ハ医家統計家ノ争論ニ上リ…余ハ喜ンデ自ラ機辟ヲナシテ以テ両家ノ間ニ斡旋シ…」というくだりで登場し、「ワナ」とルビが振られていることは印象的です。